



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

主権者教育プロジェクトの実践報告：「遊び」を生かして主権者を育てる社会科・公民科を中心とした小中高連携カリキュラムの開発

メタデータ	<p>言語:</p> <p>出版者: 東京学芸大学教育実践研究推進本部</p> <p>公開日: 2024-03-14</p> <p>キーワード (Ja): 主権者教育, 教科横断, 小中高連携, 遊び, 授業実践, カリキュラム開発, ETYP: 教育実践</p> <p>キーワード (En): Sovereignty education, Cross-curricular education, Collaboration between elementary, junior high and high schools, Play, Classroom practice, Curriculum development</p> <p>作成者: 荻上, 健太郎, 長澤, 京子, 上園, 悦史, 上野, 敬弘, 長谷川, 智大, 早川, 光洋, 齋藤, 貴博, 内藤, 圭太, 山田, 剛史, 平山, 秀人</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属: 東京学芸大学, 東京学芸大学, 東京学芸大学 附属竹早中学校, 東京学芸大学 附属竹早小学校, 東京学芸大学 附属高等学校, 東京学芸大学 附属竹早小学校, 東京学芸大学 附属竹早中学校, 東京学芸大学 附属竹早中学校, 東京学芸大学 附属竹早小学校, 東京学芸大学 附属竹早小学校</p>
URL	<p>http://hdl.handle.net/2309/0002000295</p>

主権者教育プロジェクトの実践報告

——「遊び」を生かして主権者を育てる社会科・公民科を中心とした小中高連携カリキュラムの開発——

荻上 健太郎*¹・長澤 京子*²・上園 悦史*³・上野 敬弘*⁴・長谷川 智大*⁵・
早川 光洋*⁴・齋藤 貴博*³・内藤 圭太*³・山田 剛史*⁴・平山 秀人*⁴

教育インキュベーションセンター

(2023年9月19日受理)

1. はじめに

東京学芸大学教育インキュベーション推進機構では、2021～2022年度に、文部科学省「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究」¹⁾の委託を受け、主権者教育をテーマとした取り組み「主権者教育プロジェクト」を実施した。本プロジェクトは、本機構が事務局となり、本学附属校（附属竹早小学校、附属竹早中学校、附属高等学校）において、外部協力者との連携により、授業実践と学習プログラムの開発に取り組んだものである。本稿ではプロジェクトの取り組み内容について報告を行う。

り、変化のスピードが早く予測困難な時代となる中、子どもたちが、自分たちの未来、自らが暮らす社会をより良いものにするために、主権者として主体性を持って社会と関わっていけるようになることは、学習指導要領における「生きる力」を育むことそのものともいえる。

主権者教育では、社会参画意識や社会形成に参画する態度を実践の中で育成するために、実社会との接点を重視しつつも、教科を横断するとともに学校種を縦断して連携することで、カリキュラムオーバーロードの問題に対しても有効な学習プログラムやカリキュラム・マネジメントが求められる。

2. 主権者教育プロジェクトについて

2. 1 プロジェクトの背景

選挙権年齢（満18歳以上）や成年年齢（18歳）の引き下げを受け、主権者として求められる力を育成する教育（主権者教育）がより一層求められる中、主権者教育は現行の学習指導要領においても重視することの一つと位置づけられ、学校教育においても様々な取り組みが進められている。一方で、選挙の投票率向上のような狭義の文脈で主権者教育が捉えられることもあるが、本来的には、社会を担う責任ある主権者として、子どもたちが真に必要な資質・能力を育むことを目指すものである。複雑さや不確かさがますます高ま

2. 2 プロジェクトの主題

そこで本プロジェクトでは、「遊び」の持つ自発性、主体性、他者性、協働性といった特性、実社会や発達段階との円滑な接続可能性に着目し、小中高の連携を図りつつ、社会科・公民科を中心とした教科等横断的、社会参画的なカリキュラム・マネジメントを試みることで、子どもの分断や孤立を超えて、教科の知識や技能を役立たせながら、自立し、他者と連携・協働しながら、社会を生き抜く力など、主権者としての資質・能力を育む学習プログラムを開発することを主題として推進した。

*1 東京学芸大学 教育インキュベーションセンター (184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1)
*2 元・東京学芸大学 教育インキュベーションセンター
*3 東京学芸大学 附属竹早中学校 (112-0002 東京都文京区小石川 4-2-1)
*4 東京学芸大学 附属竹早小学校 (112-0002 東京都文京区小石川 4-2-1)
*5 東京学芸大学 附属高等学校 (154-0002 東京都世田谷区下馬 4-1-5)

2. 3 プロジェクトの概要

2. 3. 1 実践校

- ・東京学芸大学附属竹早小学校
- ・東京学芸大学附属竹早中学校
- ・東京学芸大学附属高等学校

2. 3. 2 実践の概要

2. 3. 2. 1 2021年度の取り組み

(1) 附属竹早小学校

「ぼくらのオリンピック」【3年生・総合学習・17時間】

「オリンピックをつくる」というコンテンツの中で、オリンピックの祭典性や競技の形式、用具に関する条項等といった体育的な知識の獲得であったり、国語の話す・聞く技能であったり、学習指導要領の目指す主体的に学ぶ態度の涵養を目指す。

(2) 附属竹早中学校

「チームスポーツを通して公平・公正なルールのあり方について協働する」【3年生・保健体育科・8時間】

サッカーという遊びを構成するルール（仕組み）を軸に、自らがその空間を生み出す主体となって、より面白い遊びをつくりあげるために、自分たちのグループで起きていた事象を振り返り、感想の共有、意見交換、評価をしながら改善に向けてアクションを起こす。

2. 3. 2. 2 2022年度の取り組み

(1) 小中高連携

「当事者との対話や、専門家へのインタビュー、アンケート調査などの諸資料などから、探究的な学びを深める」【社会科（小学6年生・4時間、中学3年生・5時間）・公民科（高校2年生・1時間）】

①小学校

誰もが安心して暮らせる共生社会の実現に向けて自分や社会が取り組むべき課題を話し合う。

②中学校

日本の障がい者支援アンケートをふまえ、現在の選挙の課題を直接聞き、公平・公正の視点から話し合いを通して、解決への糸口を探ったり、新たな課題を見つけたりしながら、多様性を認め合う社会を目指して自らの生き方・あり方を問い直す。

③高等学校

インクルーシブな選挙制度の実現のために、主権者として、諸制度を適切に理解するとともに制度の影にある諸課題を浮き彫りにし、解決策を議論する。

(2) 附属竹早小学校

「身近な事象や関心事を糸口に実社会の課題と結びつけ、多角的・多面的に考察する」【5年生・算数・1時間】

合計特殊出生率の読み取りから、少子化をどう思うかについて意見交換をする場面を設定し、出生率1.3の値が小数值であることから10人を単位に日本の少子化の現状と課題について話し合いながら理解を深めさせる。

2. 3. 3 実施体制

本プロジェクトの実施体制は以下のとおり。(敬称略。所属役職等はプロジェクト実施時のもの)

(1) 東京学芸大学

教育インキュベーション推進機構 准教授 荻上健太郎 (プロジェクト責任者)

数学科教育学研究室 教授 西村圭一

教育心理学講座 教授 松尾直博

教育インキュベーション推進機構 専任講師 長谷川友香

理事・副学長 松田恵示

教育インキュベーション推進機構 専門研究員 長澤京子 (連携コーディネータ担当)

(2) 実践校 (附属)

東京学芸大学附属高等学校

校長 大野弘

教諭 (公民科) 長谷川智大

教諭 (数学科) 佐藤亮太

教諭 (保健体育科) 松川 想

東京学芸大学附属竹早中学校

校長 藤本光一郎

教諭 (社会科) 上園悦史

教諭 (社会科) 内藤圭太

教諭 (社会科) 石戸谷浩美

教諭 (数学科) 小岩大

教諭 (保健体育科) 齋藤貴博

東京学芸大学附属竹早小学校

校長 鎌田正裕

主幹教諭 山田剛史

教諭 上野敬弘

教諭 早川光洋

教諭 恒川徹

教諭 平山秀人

(3) 協力者: KSTN (きょうそうさんかくたんけん
ねっと)

学習院大学 教授 秋田喜代美
福井大学 教授 木村優
東京大学 教授 小玉重夫
広島市立大学 学生 竹内陽渚
早稲田大学 学生 南朴木里咲
福島大学 学生 本田美久
東京大学 学生 緩詰千馬
角川ドワンゴ学園N中等部 生徒 七島海希
新潟大学附属新潟中学校 生徒 他田さくら
福井大学 学生 小島萌々花
熊本市教育委員会 塩津昭弘
熊本市立必由館高等学校 生徒 石川明嘩
東京大学教育学部附属中等教育学校 生徒 提橋みどり

(4) ゲストティーチャー

東京海上ビジネスサポート 新堀隼
特定非営利活動法人境を越えて 理事長 岡部宏生
サウンドスケープデザイナー 武者圭

3. プロジェクトの実施内容

3. 1 2021年度の実践内容

3. 1. 1 附属竹早小学校

(1) 学習活動のテーマ: ぼくらのオリンピック

(2) 実践目的

「オリジナルオリンピックをつくる」ことをコンテンツに据え、それに関わる要素を内容と統合しながら、体育的な知識の獲得であったり、国語の話す・聞く技能であったり、学習指導要領の目指す主体的に学ぶ態度の涵養を目指す。

(3) 実践計画

- ・対象: 第3学年1クラス (34名)
- ・授業者: 早川光洋
- ・単元計画: 総合的な学習の時間 (全17時間)

(4) 実践内容 (報告書より一部抜粋)

第0時 12月1日 オリンピックといえば・・・

実践を始める前に、まずはオリンピックのイメージマップをつくる活動を行った。

第1時 12月2日 やってみたいことはなに?

クラスでオリンピックをつくるにあたって「大会の開催が、2週後の5・6時間目であること」「全員が競技に参加でき、楽しめること」のふたつを教師から初めに提示した。この時間では、競技の選択ができな

かったため、どの競技を行うがよいか考えてきて次の時間に話し合うことを確認して終了した。

第2時 12月3日 やってみたいことはなに?②

前時に続いて競技の選択することからスタートした。「みんなでやりたいものはどれか?」と子どもたちに訊き、理由を話してもらった。

なかなか決まる気配が見られずにいた時にINくんから、「どれもおもしろそうだし、体育の時間も使ったらたくさんできるんじゃない?」と提案がされた。それに対して、「オリンピックって1日で終わるものじゃないからいいね。」「そうしよう!」と周りの子どもたちも同調する姿があった。そこで、オリンピック大会ではなく、オリンピックweekとして、3日間に分けて開催することが決定した。

第3時 12月6日 やってみたいことはなに?③

話し合いを始める前に、実践者が団体種目と個人種目、器械・力試し、球技、陸上を分類して板書をして示した。ここで意図していたことは、競技の特性や競い方の違いを意識して種目選択をしてほしいという実践者の願いがあった。

「すべての競技を行うことは時間的に難しい。」ということ子どもたちに伝えた上で、再度どの競技を行いたいのか話し合いを進めようとしたところ、KYくんから、「競技を合体させて、ルールを作ったらどうか?」という提案がされた。実施日まで決めることができなかったので、次時に実施日を決めることを確認して終了した。

第4時 12月7日 なきゃ困ること。あったらいいこと。

実施日を決めるにあたり、「時間がかかりそうなものは1時間使える日を選んだ方がよいのではないか。」と実践者から提案するところからスタートした。

ここまでで競技日程が全て決まったため、「今後みんなで決めなければならないことはないか。」と投げかけた。多くの子は日程が決まったことで、そのまま実施できると思っていたようであったため、実践者から「これ誰が運営するの?」と訊くと、「チーム分けが決まってない」というEIちゃんの見聞を聞くと、WKくんが「用具の準備ができていない。」と気づいた。改めて考えると各試合等の時間配分や対戦方式についても検討する必要がわかった。

第5時 12月7日 係の時間①

初めての係活動は打ち合わせに多く時間を使うグループが多かった。子どもたちの様子を見てみると、すぐにやることを見つけることができた係とそうでない係に別れた。

第6時 12月8日 みんなで決めなきゃいけないこと

係の活動が動き出したため、みんなで決めることをまずは確認した。チーム分け、時間配分、対戦方式の3つが出てきた。

子どもの学習感想を読んでもみると、MNちゃんは、「トーナメントだと負けて怒る人がいて大変だからリーグ戦でよかった。」MSちゃんは、「リーグ戦だとみんなと戦えるし、強い相手とも戦わなきゃいけないけど、それでコツを掴むこともできるだろうからいいと思う。」と書いていた。他にもリーグ戦に決まったことについて肯定的に捉えていた子が多いようであった。

第7時 12月8日 係の時間②

本時も前の係の時間に引き続き子どもたちは意欲的に活動していた。この時間に目についたのは、用具係であった。メンバーの半分は全体のメモを見ながら話し合いに参加していた。

第7.5時 12月9日 ピクトグラムだるまさんをやってみよう

この日は、朝から全校集会があり、その後振り返りと専科の時間となったため担任の時間がとれなかった。教室で簡単にルールの確認を行った。話を聞いていくと、住んでいる地域やクラスによってルールが微妙に違うことがわかったため、共通するルールを確認し試しの遊びをした。

第8時 12月10日 係のみんなから提案すること(活動研本時)

実施を翌週頭に控え、本時に行いたいことを確認した。係活動を進めていくことと、木曜日に実施するオリンピック大会の計画(時間、チーム、対戦の仕方)が挙がった。子どもたちにどちらから行うか尋ねると、直近に迫ったオリンピック大会1日目の準備をまず進めていくことが必要だろうという意見に多くの子が賛同し、係の活動を進めることとした。

第9・10時 12月13日 決め残していることは?

この日は、みんなで決めたいこととして、トーナメントの組み合わせ抽選会と障害物リレーの内容があることを確認してから活動をスタートさせた。担当する競技進行係と用具係の準備があったため、係活動→全体でも話し合い→係活動という流れで行うことを確認した。

第11時 12月13日 3-1オリンピック大会 ~かっぱしダッシュ~

ついにオリンピック大会が開催された。これまで計画や準備をしてきたことを子どもたちは発揮しようと

気持ちが高まっている様子はよく伝わってきた。しかし、いざ始めようとする、トーナメント表がない。スピーカーがない。用具が足りない。デジカメの充電が切れている。といったトラブルが頻発した。結果、予定していた時間より大幅に遅れて開始された。

第11.5時間目 朝の会にて ~みんなはどう思った?~

朝の会にてセレモニーの続きが行われた。校庭とは違い教室では比較的落ち着いて話を聞く様子がある。大会中の興奮がないというのもあるのだろう。その後の担任からの話で前日の様子について子どもたちに聞いてみた。

第12・13時 12月14日 イコールコンディションを改めて考える

準備に使える時間はこの2時間が最後となった。子どもたちはすぐに係の活動に入ろうとしたので、実践者から、「二人三脚はどうやって対戦するの?」と問いかけた。

第14時 12月15日 3-1オリンピック大会2日目 ~たからはこび~

オリンピック大会2日目。前時にそれぞれの係で動きを確認していたため、用具等の準備がとても早い。選手として参加する子どもたちの姿も熱くなる場面も見られたが、ゲームが終われば互いの様子を称える姿も見られた。

第15・16時 12月16日 3-1オリンピック大会3日目 ~4種目を行うメイン大会~

オリンピック大会3日目。この日は4種目を行うこととなっていた。競技が始まる前に、全てを用意してから行う予定を立てていた。開始時間になっても、用具係が動くのみで他の子たちは時間を過ぎてからやってきた。子どもたちの姿を見て、「どういう約束になっていた?このままじゃまた同じこと繰り返すよ?」と子どもたちに投げかけた。

第17時 12月17日 どうだった? 3-1オリンピック

オリンピック大会を終えて、これまでの活動について振り返りを行った。「楽しかった。」「またやりたい!」という声から始まった。また、取り組み方や応援の態度など雰囲気づくりがよくなり、クラスの空気が変わってきたことを子どもたちは感じているようであった。最後に1人ひとり振り返りを書いて本活動を終了した。

学びの履歴を残したクラスボード

2学期にクラスの学び対象としてきたことを教室後方の黒板に少しずつ書き加えていった。活動の途中で

過去の学びを振り返り、子どもと子ども、子どもと教師の間で活動の意味を共有していった。



図1 学びの履歴を残したクラスボード
(東京学芸大学附属竹早小学校, 2021)

3. 1. 2 附属竹早中学校

(1) 学習活動テーマ

サッカー

(2) 実践目的

サッカーを遊びと捉え、そのルールを主体的に考え、より楽しい、面白い遊びの空間を協働的につくる活動を通して、問題を見出したり、他者と協働したりする力、及び問題を解決する主体として関わる態度を育む。

(3) 実践計画

- ・対象：第3学年男子4クラス（各クラス18名）
- ・授業者：齋藤貴博

表1 単元計画：保健体育科（全8時間）

時	授業目標	学習内容
事前	自分や他者がサッカーをどう捉えているのか可視化する。	アンケートを実施し、サッカーに対する自分と他者の捉えを見つめる。
1	サッカーの特性を理解できるようになる。	ドリブル・パスゲームを行い、競い合っていることは何かを3つの局面（運ぶ、かわす、入れる）から整理する。
2	サッカーのゲーム性、ルールの必要性に気づくことができる。	ボール集めゲームを行い、ボールを運び、相手をかかわし、目的の場所までボールを入れられるかの攻防の面白さを味わう。
3	サッカーを面白くするために、必要な視点を獲得できる。	映像で前時を振り返り、遊びをより面白くする視点を導き出す。
4	サッカーの事象を捉え、より面白くする議論を展開できる。	オフサイドやファウル、試合時間や再開方法などのルールの意味を確認し、生徒提案（1回目）の遊びを実施する。
5	サッカーの事象を捉え、より面白くする議論を展開できる。	サッカーにおける技術の意味や、練習の必要性について理解し、生徒提案（2回目）の遊びを実施する。

6	サッカーの事象を捉え、より面白くする議論を展開できる。	サッカー経験者と未経験者との間で生じるプレーのしづらさを思考し、生徒提案（3回目）の遊びを実施する。
7	サッカーの事象を捉え、より面白くする議論を展開できる。	これまで重ねた議論と遊びを受け、最後の生徒提案（4回目）の遊びを実施する。
8	サッカーの事象を捉え、より面白くする議論を展開できる。	4回提案された遊びから、最も面白いとされたものを再構成し実践する。
事後	サッカーへの捉えがどのように変容したのかを認識し、学んだことを言語化できる。	生徒から集めた評価項目を元にアンケートを作成し、単元を振り返る。

(4) 実践内容（報告書より一部抜粋）

サッカーを遊びと捉え、参加する生徒全員がより楽しい、面白いと思えるサッカーを創り出すことが、生徒と共有する活動の目標である。

実践の事前活動では、そうした目標を生徒と共有した上で、1人1台端末環境を利用して、アンケート、Teamsを使ったオンライン上でのサッカーづくりに関する議論及びサッカーに関する調べ学習の共有を行った。この目的は、活動に対する関心・意欲、当事者意識を高めるとともに、サッカーづくりに関するいくつかの観点について深めることである。実践前にこうした活動を行った意図は、授業では考えたルールに基づくサッカーを実際に行い、それを振り返って議論し修正する時間をなるべく多く確保するためである。

例えば「『みんなが面白かったかどうか』はどのように評価しますか?」といったテーマが与えられ、生徒は様々な観点から考えを出し合い、「みんなが楽しめるサッカーづくり」について深めることができた。

実践は、単元計画に示した第4時から8時で行った。各授業は、次のような展開で行った。まず生徒がその日に行うサッカーのルール等のプレゼンをし、それについて質疑応答を行う。続いて、サッカーを実践し、その様子を撮影する。そして、撮影した動画やホワイトボードを用いながら実践を振り返り、意見交換を行う。最後に、学習感想及びサッカーノートを記述するという流れである。単元後にはアンケートを実施した。単元前アンケートと比較して生徒の変容を探り、実践の有効性を検討する資料とした。

(5) 成果

単元前後のアンケートでは以下のような結果だった。

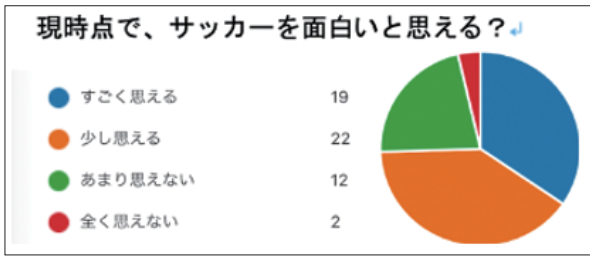


図2 単元実施前のアンケート結果その1 (東京学芸大学附属竹早中学校, 2021)

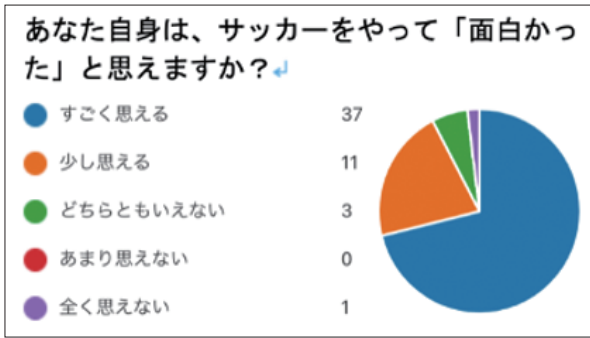


図3 単元実施後のアンケート結果その1 (東京学芸大学附属竹早中学校, 2021)

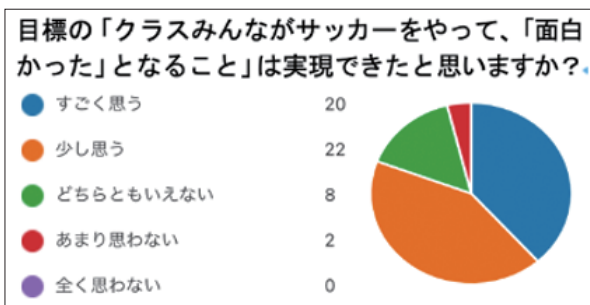


図4 単元実施後のアンケート結果その2 (東京学芸大学附属竹早中学校, 2022)

単元前後のアンケートを比較すると、80.8% (52人中42人) の生徒が実践目標を達成できたと感じていることが分かる。また、74.5% (55人中41人) から92.3% (52人中48人) と、サッカーの面白さを感じている生徒が増えていることが分かる。また、自由記述では次のような生徒の記述がみられた。

【単元前アンケートより】
 Q1 現時点でサッカーを楽しんでいるか? あまり思えない。理由は、ボールをとりに行くと、けがをしようとするか、けがをしてしまうかもしれないと怖くなって、とりにいけないから。それと、あまりサッカーをしたことがないのでサッカーの真の面白さを身に染みて体感したことがありません。サッカーのどこが楽しいかも正直あまり理解できていないから。
 Q2 今後より面白くしようと思う? すごく思う。サッカー以外にもやることですが、やるからには楽しみたいです。だからうまくやりたいのもそうですが、やはり一番は楽しみたいです、より面白くしたいです。

図5 単元実施前のアンケート結果その2 (記述) (東京学芸大学附属竹早中学校, 2021)

【単元後アンケートより】
 Q3 一番楽しかった授業は? 遊び4回目の授業。議論で自分が思う改善したいところを、みんなで話し合い改善できたことにより、前も面白かったがさらに面白くなったのはここだと思ったから。また4回目ということもあり、以前より少しだけ上手くなっていたことも楽しかった要因の一つ。
 Q4 目標達成できた? その理由は? すごく思う。未経験者にもすごく配慮されたゲームだったため、未経験者でも活躍できる場所があったり連携が必須だったり面白い、楽しいを実現できたと思います。
 Q5 あなた自身は面白く思える? すごく思える。普通のサッカーをしていると、毎回、何もできず、ただ傍観しているだけになってしまうから、正直、今回の授業でもそんな感じになると思っていた。だけど、今回は、未経験者を思いやるサッカーで何もできなかった僕からすると、ただボールをパスしてもらい、ボールに触る。この何気ないものがとても楽しかった。ボールが自分にくるからこそ、その分頑張ろうと思った。そういう熱くなれる気持ちも含めて楽しかった。

図6 単元実施後のアンケート結果その3 (記述) (東京学芸大学附属竹早中学校, 2021)

単元前アンケートでは、サッカーへの意欲を読み取れるものの、サッカーの面白さを理解するに至らないことも読み取れる。これに対し、単元後のアンケートでは、自分たちで遊びを模索することで、一層サッカーを楽しむことができ、未経験者を包摂するルールづくりが、全員が楽しめるサッカーづくりに寄与したと実感していることが伺える。また、本活動がサッカーに対する主体的なかわりを促し、サッカーの面白さの実感につながっていることも一定の成果といえる。

こうした生徒の様相は、遊びに主体的にかかわり、協働してよりよい空間を創造するという「遊び」から学習が発展していく主権者教育実現を示した子どもの姿と考えられる。

(6) 課題

本実践を受け、上記のように、サッカーの知識や思考力判断力表現力、これらを支える学びに向かう力は高まりを見せた一方で、技能の高まりの可視化はやや不十分である。授業者の観察や、記録映像の分析、生徒の実感を踏まえれば、技能の高まりはあるといえる一方で、その高まりが何に起因するものなのかを今後実証したい。

遊びを手段的に捉えず、目的のあるいは学習の起点として捉えることを他教科と共に見出すことが必要である。文化としての「遊び」には、「概念」と「具体」が混在するが、教育においては「手段」的認知が充満している。あるいは、遊びが社会や教育から排除される様相から、「主権」に関して人間の本質的な営みや教育の根幹を再構成する必要がある。例えば、数学科との関連において、「スポーツの勝敗確率」をどう分析し、遊びの不確定性と結合させるか。さらには、社会科との関連で、「ルール」が決定し実行されていくプロセスの学習や、文化から排除されてしまう人々を生む社会構造を紐解くなどが考えられる。つまり

は、より良く生きることを模索する教育の一つとして「主権者教育」が他教科との連携において意味を持つことをさらに研究する必要がある。

3. 2 2022年度の実践内容

3. 2. 1 小中高連携による実践

2022年度は、「障がいと選挙」を共通テーマとした上で、小中高の校種を縦断した連携により実践を行った。

3. 2. 1. 1 附属竹早小学校

(1) 学習活動テーマ

より良い社会を目指して

(2) 実践目的

視聴覚資料やインタビュー活動を通して視覚障がいのある人々の生活の工夫や苦労を理解し、誰もが安心して生活することができる共生社会の実現に向けて自分や社会が取り組まなければならないことについて障がいのある人々の立場に立って考え、提案することが出来るようにする。自分のことだけではなく、自分の周りの人々の置かれている状況に目を向けるために新聞記事やニュース映像等を活用して調べ、社会が抱えている課題を見つけるようにする。

(3) 実践計画

- ・対象：第6学年1クラス（35名）
- ・授業者：上野敬弘

表2 単元計画：社会科（全4時間）

次	内容
1	・NHK「みんなの選挙」を視聴し、視覚障がいのある人が選挙に対して否定的な意見をもっていることに触れ、その人々が抱える困難について考える。 ・視覚障がいのある人々に対する疑問をノートに書き、インタビュー活動の準備をする。
2・3	・ゲストティーチャーを迎え、事前に作成したインタビュー内容を尋ね視覚障がいに対する理解を深める。 ・ゲストティーチャーの選挙のデモンストレーション等を通して、誰もが安心して選挙や生活ができることに必要なことは何かを考え、意見を交流する。
4	・前時の意見交流を踏まえ、事前アンケートで答えた「日本は、障がいのある人が不自由なく日常生活を送れるような取り組みが進んでいると思いますか。」を振り返り、より良い社会（共生社会）を進めてくために自分たちができることを考え、まとめる。

(4) 実践内容（報告書より一部抜粋）

- ①ゲストティーチャーに尋ねたいことを考え、質問をまとめる
- ・NHK「みんなの選挙」HP²⁾に掲載されている「視

覚障がいがある方の投票について解説」を視聴し、選挙と障がいのある人々の関係について関心を寄せる。

- ・視覚障がいのある人々の生活の様子や選挙に対する考え方について尋ねるために、自分たちが知りたいことをもとに質問事項を考える。
 - ・考えた質問事項を内容毎に分類（1. 視覚障がいに関すること、2. 障がいを抱えての選挙に関すること）し、ゲストティーチャーにメールにて投げかける準備を行う。
 - ・小中で質問事項を共通化した「共生社会に関するアンケート」についてタブレットを使用して行う。このアンケートは、本単元の終わりにもう一度行うことで、共生社会について視覚障がいのある方との交流を通して考えることができたかを検証する。
- ②ゲストティーチャーの方から話を聞いて、より良い社会について考える
- ・「みんなの選挙」をもう一度視聴し、事前に考えた質問事項をゲストティーチャーへ投げかける。
 - ・点字器を使ってゲストティーチャーが模擬投票を行う様子やICTを活用して他者とコミュニケーションをする姿、質問事項に対する回答をもとに、視覚障がいに対する自分の考えを振り返り、見直す。
 - ・より良い社会について「共生社会」という言葉をキーワードに自分の考えをノートに書く。児童の記述には、「誰もが同じように暮らすための援助や介助等の支援」「点字器が錆び付いていないような整備の必要性」「障がいのある人に対しての勝手なイメージを作らず、広げない努力」などが書かれていた。
- ③自分たちの考えをまとめ、ゲストティーチャーに投げかける
- ・前時にノートへ記載した内容をもとに、4～5名程度のグループになって「共生社会」に向けて自分たちができることを話し合い、まとめた。児童は、「障がいのある人たちを一人の人として接すること」「健常者との差を埋める努力を私たちがすること」「障がいに対する常識を変える」「手話などを習得して、自分たちも障がいのある人々に寄り添えるようにチャレンジする」などが考えとして出され、これらをゲストティーチャーに送付した。
 - ・ゲストティーチャーからは、「一人一人が違って同じ人間はいないこと」「同じことをしても、ありがたいと思う人もいれば、そうと捉えない人もいること」「『平等、公正と公平、過程』が大切になること」が回答として寄せられた。この回答をもと

に、改めて「共生社会」に対する自分の考えについてノートに書き、「共生社会に対するアンケート」を行って本活動を終了した。

(5) 成果

①児童生徒の変容等

- ・本活動では、事前 (N=33,2名欠席, 円グラフ内径) と事後 (N=31, 4名欠席, 円グラフ外径) に「共生社会」に関するアンケートを実施した。本活動を実施してアンケートに関する回答にも変化が伺えた。

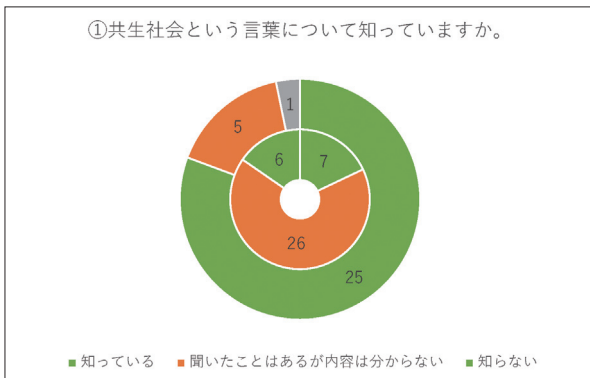


図7 アンケート結果その① (活動前後の比較)
(東京学芸大学附属竹早小・中学校・高等学校, 2022)

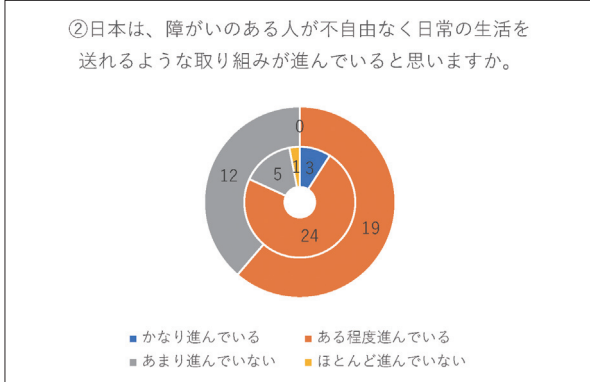


図8 アンケート結果その② (活動前後の比較)
(東京学芸大学附属竹早小・中学校・高等学校, 2022)

- ・アンケート①については、事後に「知っている」以外に答えた児童6名に対して対面にてその理由を尋ねたところ、「共生社会に対してまだ十分に理解できていないと思うから」というものであり、更に考えなければならないと児童が考えている様子が伺えた。
- ・アンケート②については、「ある程度進んでいる」と答えた児童3名をランダムに抽出して尋ねたところ、道路など社会インフラとしてまだ未整備の部分があるからなどの理由で答えたことが分かった。
- ・「あまり進んでいない」を答えた児童3名について

もランダムに抽出して尋ねたところ、「障がいのある人々が不自由なく暮らせる程度まで整備や人の考えが改善されていない」と考えたからということが分かった。このことから、本活動をきっかけに共生社会や障がいのある人たちへの関心が高まり、内在する課題に対して考えていこうとする児童が出てきていることが伺えた。

②取組の工夫

- ・アンケート結果の傾向を大まかに掴むことで、児童の障がいに対する理解や捉えについて共有できるようにする。また、児童の視覚障がいに対する理解が限定的であるので、ゲストティーチャーから児童の障がいに対する疑問を答えていただく機会を設けた。
- ・自分達の考えたことをゲストティーチャーへ投げ返すことで、自分たちの考えが実際と乖離していないかを確認し、実社会とのつながりを意識できるようにした。

③他地域でも参考となると考えられる点

- ・ゲストティーチャーとの関わりを継続的に行うことで、自分たちの考えたことを投げ返したり、回答をもらったりすることだけでなく、自然な交流やゲストティーチャーを通して実社会とのつながりを意識できるようにした単元設定は他地域でも参考になるものとする。

(6) 課題

- ・視覚障がいだけでなく、それ以外の障がい等についても考える機会をつくり単元内に入れることが必要なのではないか。
- ・障がいに視点が向いているので、このことを選挙に結びつけるよりも政策に結びつけて考えていくことが授業改善になるのではないか。

3. 2. 1. 2 附属竹早中学校

(1) 学習活動テーマ

障がいのある人からみた選挙の壁

(2) 実践目的

現代の選挙について障がいのある人々の立場から課題を見だし、公平・公正の視点から考察し、背景となる問題まで幅広くとらえさせ、現状と課題について理解する。多様性を認め合う社会を目指して、どのような課題があるのか見つけ出し、その解決に向けて取り組む人々の姿を学ぶことを通して、解決への糸口を探ったり、新たな課題を見つれたりしながら、よりよい社会の実現にむけて自らの生き方・あり方を問い直す。

(3) 実践計画

- ・対象：第3学年1クラス（36名）
- ・授業者：上園悦史，内藤圭太

表3 単元計画：社会科（全5時間）

次	テーマ
1	民主主義と政治
2	政治参加と選挙
3	政党と政治
4	マスメディアと世論
5	選挙に行こう

(4) 実践内容（報告書より一部抜粋）

① ゲストティーチャーからの基調講演を聴く

- ・ゲストの自己紹介とプロフィール，ALS（筋萎縮性側索硬化症）についてスライドで説明する。
- ・障がいのある人たちにとっての選挙の壁について，ご自身がどのように選挙で投票をするのか，経験をお話いただく。呼吸器をしているため，意思の確認をするためにも介助者の支援を必要としている点や，郵便投票の制度についてもふれ，ALS患者たちが国を相手取って裁判を起こして勝ち取った制度であることを理解させる。



図9 ゲストティーチャー（岡部氏）を招いた授業（東京学芸大学附属竹早中学校，2022）

② 「選挙の壁をつくっているのはだれか。なぜ壁があるのか。」について考える

- ・ゲスト自身の経験から感じる「壁」と突破法についてご自身の経験からお話をしていただく。
- ・車椅子を利用している例を出して，「個人モデル」（障がいは車椅子の人にある）から「社会モデル」（障がいは車椅子を利用できない環境にある）へと思考を転換していくことの重要性を理解させる。
- ・環境がととのっていないことで社会に参加できない状態を「障がい」として捉える視点を共有する。

③ 「自分が障がい者だったら選挙に行くか」をテーマ

にグループ討論して考えを深める

- ・あなたが障がい者だとしたら，投票に行くかどうか？ その理由も考える。
- ・障がいのある，ないに関わらず，多様な人々の立場から考えるには，何が必要だろうか？
- ・投票所に行けるかどうかではなくて，国民として主権があるかどうかが大切なことであるというゲストからの指摘を受けて，グループで話し合いの場を設定する。

(5) 成果

① 児童生徒の変容等

- ・生徒の感想から，「もし私がALSになったら，思うように伝わらないもどかしさから話すことを諦めてしまうのではないかとも思いました」「障がい者支援の発展途上である日本において新しい課題を気付かされた」というように，これまでになかった問題意識を触発されて，世の中への見方・考え方がかわっていった生徒も多くいたことがわかる。
- ・「僕は授業内で幼少期から身近に感じ，教育としても副読本の導入など力を入れて，障がい者がいるという事実が日常に感じられる世の中が訪れればいいなと思った」「個人がすべて負担を負うのではなく，世間一般的に自分たちを変えていく，という思考になればよいと思う」というように，個人モデルから社会モデルへの思考の展開をきっかけに，広く社会への問題関心が深められている姿も見ることができた。
- ・主権者としての投票を価値あるものとして平等に行使しうる権利が妨げられていることへの不思議さ，疑問，批判的な思考が生徒たちの中に芽生えてきた。

② 取組の工夫

- ・障がいをもつ人たちから見た社会の様々な課題を見出し，特に選挙に焦点をあてて，その課題の改善に向けての方策についてグループで話し合ったり，討論したりする。
- ・グループでの話し合いの内容を全体で共有・概観することにより，自分とは異なる意見や価値観をもつ人の存在を知り，さらに与えられた問題に対して，それではどうあることが良いことなのか，という人としてのあるべき姿が探究されるように工夫をする。
- ・多様性を認め合う社会を目指して，どのような課題があるのか見つけ出し，その解決に向けて取り組む人々の姿を学ぶことを通して，解決への糸口を探ったり，新たな課題を見つけたりしながら，よりよい

社会の実現にむけて自らの生き方・あり方を問い直すきっかけとする。

③他地域でも参考となると考えられる点

- ・選挙についての関心を高めるために模擬投票を実践することはあるが、今回のように選挙権を公平に行使用することが難しい立場の視点から改めて公正な選挙、平等な社会、よりよい選挙制度のあり方を問うという視点は、主権者である国民として責任を自覚させるよい機会となる。
- ・事前の学習として有権者としての意識を持たせるとともに、現時点では選挙権を持ちえていない年齢であっても、なんらかの政治的課題や政策への関心を持ち、社会のあり方を批判的に考察するきっかけをもつことは、選挙の仕組みを理解するだけでなく、選挙への関心を高め、主権者としてその意義や課題を自ら考えていく力となっていくものであり、他地域でも参考となるものである。

(6) 課題

障がいのある方々が社会への参加をしていくためにどのような壁があるのか、また、少数者の意見だからこそ、選挙という平等な価値をもった行動を保障していくことは、民主的な社会の形成になによりも大切なことであり、多様性を認め合う社会の基礎となっていくことが生徒たちにしっかりと意識づけられた一方で、ゲストティーチャーとして来校していただいた方との交流を通してさらに障がいへの理解、社会への関心、政治課題への関心を持って行けるような実践を構想することが今後の課題である。

3. 2. 1. 3 附属高等学校

(1) 学習活動テーマ

インクルーシブな選挙制度の実現のために

(2) 実践目的

本学附属学校三校共通で、障がい者と共に生きる社会を実現するために、障がいのある方々が抱える問題を知り、理解し、考え、提案する。その最終段階としての高等学校における実践である。特に強く意識したことが、主権者として社会に参画する中で、自ら見出した社会課題に対してどのような立場から解決策を提案していくかということである。

(3) 実践計画

- ・対象：第2学年1クラス (39名)
- ・授業者：長谷川智大

表4 単元計画：公民科（現代社会）（1時間）

時	授業目標	学習内容
事前	選挙制度の確認及び、自分の中にある「障がい者」像の言語化。	アンケートを実施し、自らの認識の中にある障がい者と社会の関わりを具体化する。
	インクルーシブな選挙制度の実現のために	発達障がいを抱えているゲストティーチャーを招いてワールドカフェで議論する。
事後	「障がい者」という概念の再考と学びの振り返り。	生徒から集めたアンケートをもとに、学びを振り返るとともに今後の必要な学びの調整を図る。

(4) 実践内容（報告書より一部抜粋）

小中高の三校それぞれに異なった障がいのあるゲストティーチャーの調整を行い、本校においては発達障がいを抱えた方を迎えることが決まった時点で実践の核となる手法を決めた。本実践での議論に使用したのが「ワールドカフェ」と呼ばれるディスカッションの形態である。ワールドカフェは、課題に対して解決策を模索するための手法ではなく、参加した全員の意見や知見を集めることで新たな気づきを得ることに長けた手法である。本実践で重視したことの一つに、発達障がいを抱えるゲストティーチャーと対話することによって得られる知識や、関わりの薄さから生じていた思い込みや先入観を打破することがある。だからこそゲストティーチャーにはグループの一つに入ってもらったわけだが、それでもなお40人近い生徒全員と直接対話することは難しい。しかしワールドカフェによって間接的ではあるがゲストティーチャーとの対話が実現する。ワールドカフェを行う前に三校社会科公民科共通の事前アンケートを実施し、同様に事後アンケートで意識の変化を確認した。



図10 ゲストティーチャー（新堀氏）を招いた授業（東京学芸大学附属高等学校，2022）

ワールドカフェにおいて各グループがまとめたホワイトボードの一部を以下に提示する。

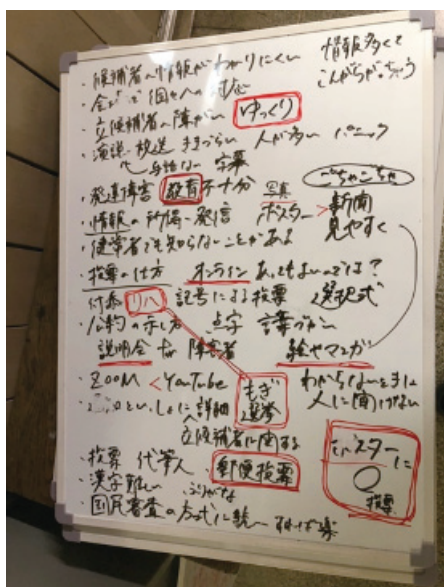


図11 ワールドカフェで使用したホワイトボード
(東京学芸大学附属高等学校, 2022)

(5) 成果

事前アンケートの「障がいのある人に関する、国や地方公共団体の施策のなかで、あなたがもっと力を入れる必要があると思うものを答えてください。」という項目における回答を一部抽出する。

- ・点字ブロック
- ・道路などの交通整備, インフラ整備
- ・盲導犬や介助犬のために水飲み場とかをもっと設置するべきだと思う。駅の改札が階段を登らないといけないところで、エレベーターとかが設置できないのであれば半分はスロープにしたほうがいいと思う。
- ・一般人に障がい者への接し方のレクチャー。「助けたい」という思いがあっても何をすれば良いかわからないなどの理由で助けることを遠慮している人が少なからずいると思うから。
- ・バリアフリー
- ・音の出る信号機をもっと増やす。最近旧型のごっつい信号機から液晶テレビみたいな信号機に変えられる工事は多くあるが、そんなのよりまず音の出る信号機に切り替えることの方が優先されるべき。
公共交通機関（主に電車）で車椅子や白杖を持った人が利用しやすいような、混雑緩和、駅とホームの間を極力無くすなど。

これらの回答からは障がい=身体障がいという認識が見えてくる。もちろん中には精神障がいや発達障がいについて言及した回答もあったが全体から見ると少

ない。主権者としてますます社会とのつながりを深めていく高校生にとって、認識によって自分の世界を広げていくことがいかに重要なかが改めて分かる。認識していないものは自分の世界の中に存在しないものなのだから。事後アンケートから一部抜粋する。

- ・障がい者にとって選挙というのは困難なことであり、それは投票するのが難しいというよりは情報を得るのが難しいという側面が大きいということ。
- ・障害を持っている方と聞くと、身体に障害のある方（手や足が不自由など）のイメージが勝手にあったけれど、ゲストティーチャーのお話を聞いて、身体だけではなく知的または精神的な障害を持っている方も多くいらっしゃるということを忘れてはいけないなと感じた。みんなが暮らしやすい社会を考えていく中で、身体障害を持っている方も知的障害を持っている方も同じ障がい者として扱ってしまっているが、障がいの重さは人それぞれなため、個人個人に合った政策を考えていかなければいけないと改めて実感した。一人一人が満足いくような社会を実現するというのはとても難しいことかもしれないが、実現を目指し自分にできることはないか日々考えながら暮らしていきたい。
- ・どうしても障がい者と考えたと、目に見えてわかる身体障がい者のことを連想してしまうが、知的障がい者の人にも優しい投票制度を作るべきだと感じた。投票制度に限らず、現代社会における裁判制度や国会などの制度をしっかりと見直す必要があるように感じた。
- ・障がいと一口に言ってもいろいろな種類があり、その種類によって日常生活の中で不便なことは違うだろうから、それを考えることが大切だと思った。

本実践では、確かに題材は障がい者と選挙であるが高等学校における実践の目標としては、主権者として社会に関わり、様々な立場から社会の問題点の解決策を実現可能な制度に落とし込んで社会に提案していく力を伸長することにある。そのために社会には本当に多様な人達がいて、独りよがりな思い込みでは本当の意味での解決すべき課題が見えないということに気がついた生徒が多かったことが本実践の成果であった。

(6) 課題

本実践を新課程の公共で継続的に実施していくことを想定した場合、内容Aの「公共の扉」で扱うか、内容Bにおいて学習指導要領に示されている13の主題のうち「政治参加と公正な世論の形成、地方自治」で扱うことか、もしくは内容Cで探究課題に落とし込ん

で単元化することなどが想定される。いずれにせよ持続可能な実践を構想するにあたり、授業開設学年の全クラスにゲストティーチャーを招いて共に議論をするという形式は常に行うには相応の困難さがあり、今回の実践を直接的にすべての高等学校へ展開させることは不可能である。今後に向けて整理すべきポイントは2つ。1つ目が始まったばかりの新科目である公共で具体的にどの内容で扱うことがもっとも効果が高いかの検証を進めること。もう一つのポイントは社会的困難を抱えた当事者と直接対話を経なくとも同じくらいの効果が期待できるような、かつ、全国の高等学校で活用しやすいような教材開発をすすめること。

3. 2. 2 附属竹早小学校

(1) 学習活動テーマ

「合計特殊出生率」から少子化について考えよう

(2) 実践計画

- ・対象：第5学年2クラス（64名）
- ・授業者：山田剛史，平山秀人
- ・単元計画：算数科（1時間）

(3) 実践内容

- ①少子化について知り、合計特殊出生率「1.3」の意味について基準を理解することで理解する。
- ・少子化といわれていることは、子どもが減って人口が減ることであることを知る。
 - ・合計特殊出生率が1.3というのは、女性1人あたり1.3人の子どもを出産していることを知る。
 - ・1人あたり子どもを1.3人出産していることから人口が増えていると読み取り、少子化としてはおかしいと捉えたり、実は今は人口が増えていると捉えたりする。
 - ・女性1人あたり1.3人ということは、男性の存在を考慮に入れて大人2人あたり1.3人と捉えると人口減が説明できることを発表したり聞いたりする。
 - ・一人の女性が生涯に1.3人を出産することから、人口が減るという説明をノートにまとめる。

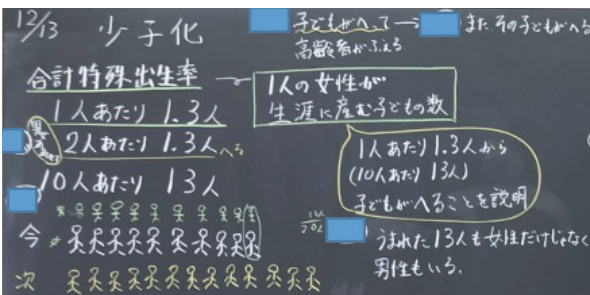


図12 合計特殊出生率1.4の意味を理解する
(東京学芸大学附属竹早小学校, 2022)

②少子化であることをよいと思うか、よくないと思うかを話し合う

- ・働く人（労働力）が少なくなることによる影響について意見を交わす。
- ・高齢者の割合が増えて、税金が重くなっていくことについて意見を交わす。
- ・人口が増えると住む場所が足りなくなり自然環境に悪い影響を生む可能性に目を向ける。
- ・人口が増えると食糧不足になる可能性に目を向ける。
- ・子どもの人数が少ないとよい教育を受けさせられることについて意見を交わす。

(4) 成果

①児童生徒の変容等

- ・本学習活動は出生率の意味を明確にして正確に読み取ることと、小学5年生なりに、社会問題としての少子化について関心をもったり、投票権を有する成人になっていく自覚をもったりすることをねらいに行った。学習活動の最後に記述した児童の学習感想において、少子化についての印象や意見を書いた児童は29名中22名であった。
- ・児童の感想を一部紹介する。「少子化はわるいことばかりだと思っていたけどいいところもあることを知った。でも子供が少なすぎると働けなくなるので少子化はわるいと思う」「ぼくは何事にも多すぎず少なすぎずちょうど真ん中がいいと思いました。なので1人あたり2人の出生率がいいと思いました」「私は（少子化は）よくないと思います。なぜなら、もし子どもが高齢者になって、その時の子どもが少なくなり、結果的に人口が減ってしまうからです」「人口が減ったらけっこう大変だけど、だからってへりすぎるのもよくないと思った。だって、この調子でいくと、どんどん日本から人が消えて、日本のめつぼうが近くなってしまうから」
- ・また、投票行動や政策についての関心を書いた児童は29名中6名であった。
- ・児童の感想を一部紹介する。「ぼくはたぶん選挙に行くと思うので、もし少子化について言っていたら投票します」「その人が少子化のことを言っていたとしても、たった1人で変えることは不可能なため、ほかの人をえらぶ。1人あたり1.3人はけっこう少ない」
- ・出生率の読み取りについて書いた児童は29名中10名であった。
- ・児童の感想を一部紹介する。「少子化なのに1人あたり1.3人生まれるなんて全然減ってないじゃん、

と思ったけれど、2人あたり1.3人に減るのはけっこう大変なことだと思う。竹早小だったら次世代は260くらいに、さらに次は169人になるから」「1人あたり1.3人だとふえているように感じるけれど、実は減っている、というのは考え方をかえないと知れないから、いろいろな視点から見て、その見方が正しいか考えるのが大切だと思う」

②取組の工夫

- ・小学校第5学年の算数科では異種の2つの量の割合と同種の2つ量の割合を扱う。本学習活動で扱った合計特殊出生率は、女性1人当たりが出産する男性と女性の人数であるので、異種の2つの量の割合とも捉えられるが、人数に対する人数であるから同種の2つの量の割合とも捉えられる。本学習活動は、第5学年の異種の2つの量の割合の学習後、同種の2つの量の割合の学習の前に実践した。基準量が女性の人数で比較量が男性と女性を合わせた出生児の数であることから、基準量に目を向ける学習が行えるようにした。
- ・基準量に目を向けて合計特殊出生率の数値の意味を自覚的に読み取ることで、数値から見える少子化の現状により興味をもちやすくなった。

③他地域でも参考となると考えられる点

- ・本学習活動は我が国が抱える少子化を話題にしているため、地域を選ばない。算数科のカリキュラムの余白に設定することが考えられる。

(5) 課題

本学習活動では合計特殊出生率の読み取りから、少子化をどう思うかについて意見交換をする展開をとった。多面的な見方が出された一方で、どのように解決していくかについては話題にしなかった。どのように社会をつくるかに児童の意識を向けるために、どのような政策がよいかなどを話題にすることも考えられる。

4. おわりに

本稿では、本学教育インキュベーション推進機構が2021～2022年度に実施した主権者教育プロジェクトに関する報告を行った。本プロジェクトのテーマである「遊び」、教科横断、小中高連携は、本機構の設置趣旨や活動テーマにも関連するものであり、主権者教育を社会との接点を重視した主体的な学びととらえながら、引き続き様々なプロジェクトの組成や推進に取り組んでいきたい。

本プロジェクトの実施と遂行にあたっては、プロ

ジェクトのコーディネートをサポートいただいた長澤京子氏、授業実践を担当された、附属竹早小学校の上野敬弘教諭、山田剛史主幹教諭、平山秀人教諭、早川光洋教諭、附属竹早中学校の上園悦史教諭、内藤圭太教諭、齋藤貴博教諭、附属高等学校の長谷川智大教諭、そしてプロジェクトの推進に多大なる協力や助言等をいただいた附属竹早小学校の恒川徹、附属竹早中学校の石戸谷浩美教諭、小岩大教諭をはじめとする本学および附属校の教職員の皆様に心より深謝の意を表したい。また、ゲストティーチャーを引き受けてくださった新堀隼氏、岡部宏生氏、武者圭氏のお三方ならびにプロジェクト開始当初に対話等の機会づくりで連携いただいたきょうそうさんかくたんけんねっと(KSTN)の方々、そして本プロジェクトにご協力いただいたすべての皆様に感謝の意を表したい。

註

- 1) 実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究 (文部科学省)
(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/shukensha/1388336_00002.htm)
- 2) みんなの選挙 (日本放送協会 (NHK))
(<https://www3.nhk.or.jp/news/special/minnanosenkyo/>)

文献

文部科学省, 小・中学校向け主権者教育指導資料「『主権者として求められる力』を子供たちに育むために」, 2022
主権者教育推進会議 (文部科学省), 今後の主権者教育の推進に向けて (最終報告), 2021

主権者教育プロジェクトの実践報告

——「遊び」を生かして主権者を育てる社会科・公民科を中心とした小中高連携カリキュラムの開発——

Practical Report on the Sovereignty Education Project:

Development of a Collaborative Curriculum for Elementary, Junior High, and High Schools
Centered on Social Studies and Civics That Utilizes “Play” to Educate Sovereigns

荻上 健太郎*¹・長澤 京子*²・上園 悦史*³・上野 敬弘*⁴・長谷川 智大*⁵・
早川 光洋*⁴・齋藤 貴博*³・内藤 圭太*³・山田 剛史*⁴・平山 秀人*⁴

OGIUE Kentaro, NAGASAWA Kyoko, UEZONO Yoshihito, UENO Takahiro,
HASEGAWA Tomohiro, HAYAKAWA Mitsuhiro, SAITO Takahiro, NAITO Keita,
YAMADA Takeshi and HIRAYAMA Hideto

教育インキュベーションセンター

Abstract

This paper is a report on the “Sovereignty Education Project” conducted by Organization for Promoting Open Innovation in Education, Tokyo Gakugei University from FY2021 to FY2022. In this project, the research theme was “Development of a collaborative curriculum for elementary, junior high, and high schools centering on social studies and civics to nurture sovereigns by utilizing ‘play’”. We focused on designing classes that emphasize the value of “a curriculum with blank spaces (i.e., play),” and on exploring points of contact with society through exchanges and cooperation with outside instructors and organizations outside the school. The project was implemented at Takehaya Elementary School Attached to Tokyo Gakugei Univ., Takehaya Junior High School Attached to Tokyo Gakugei Univ., and Tokyo Gakugei University Senior High School.

Keywords: Sovereignty education, Cross-curricular education, Collaboration between elementary, junior high, and high schools, Play, Classroom practice, Curriculum development

Center for Open Innovation in Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要 旨

*1 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

*2 Former Research Fellow at Tokyo Gakugei University

*3 Takehaya Junior High School attached to Tokyo Gakugei University (4-2-1 Koishikawa, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-0002, Japan)

*4 Takehaya Elementary School attached to Tokyo Gakugei University (4-2-1 Koishikawa, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-0002, Japan)

*5 Senior High School attached to Tokyo Gakugei University (4-1-5 Shimouma Setagaya-ku, Tokyo, 154-0002, Japan)

本稿は、東京学芸大学教育インキュベーション推進機構が2021～2022年度に実施した「主権者教育プロジェクト」について報告を行うものである。本プロジェクトでは、「『遊び』を生かして主権者を育てる社会科・公民科を中心とした小中高連携カリキュラムの開発」を研究主題とした上で、社会科・公民科を中心とした教科横断や小中高の校種縦断による連携により、「余白のあるカリキュラム」＝「遊び」のもつ価値付けを重視する授業デザインや外部講師や学校外の諸団体との交流・連携による社会との接点を模索しながら授業を構想することを重視し、本学附属竹早小学校・中学校および附属高等学校において実践を行った。

キーワード: 主権者教育, 教科横断, 小中高連携, 遊び, 授業実践, カリキュラム開発